

読売歌壇

小池 光選

爺々とお風呂に入るの今日までと孫娘は言いた
り明るい声で
【評】女孫と一緒にお風呂に入るのがなにより
の楽しみ。成長してもう入ってほしいわい。
こどもが大きくなるのはどこか寂しいもの。
「明るい声」が元気で、救われる。

蠟梅と連翹の花似ているね遠くで近い私とあな
た
【評】ロウバイもレンギョウも春の花。どち
らもあざやかな黄色で、似ているといえは似
ている。それをふまえての下句がしやれてる。
あなたは親友だろうか、それとも恋人？
大雪の集落にまた来てくれた頼みの綱の移動
スーパ―
新潟市 古泉 浩子

【評】今年の日本海側の大雪、そこに暮らし
ている人々にとっていかばかり。移動スーパ
ーが頼みの綱。来てくれたはまさに実感。
しみじみと昭和のうたが聞きたかり例えは「白
い花の咲く頃」
おとす、こぼす、やたら躓くこの日ころ八十九
歳引に負く
浜松市 藤田 亜耶
小犬さへ帰る家知る冬夕べ廻った迷子の母
丸亀市 市橋 康子

いつのまにあいつこの世を去ったのか家族葬と
は素っ気ないもの
八王子市 斎賀 勇
缶珈琲飲めば短歌が生まれます今日吹く風も力
モメの声も
鳴門市 楠井 花乃
入院日のままの日めくりを一度にめくり動き始
める私の日常
福山市 杉原真理子
奥さんを大切にしていねと同級生夫を亡くす淋
しいのよと
行田市 永沼規美雄

栗木 京子選

転けたるを幾度も詫びつつ年越しぬギプスのな
かで母は痩せゆく
生駒市 高橋 裕樹
【評】転んでギプスを装着するようになった
母。年末年始にあまり動くことができなかった。
周囲に詫びる姿が痛ましい。「痩せゆく」
に心も体も委縮する様子が表れている。
わが父のこだわりのいいお雑煮を作れば孫はお
かわりをする
東京都 辻村 澄子

【評】だしや具材など、わが家の雑煮への父
のこだわりがあり、作者はそれを受け継いで
きた。今は孫たちの好物になっているのが
うれしい。「おかわり」は良い言葉である。
無視無言なれど応援しています盲導犬とすれ違
う時
三原市 天崎 千寿

【評】盲導犬は任務に集中しているので、第
三者が声を掛けたり触れたりしてはいけない
い。「応援しています」に共感を覚えた。
八十年戦争なきことありがたし記憶の底に戦火
知る身は
綾瀬市 鈴木 りえ
A1が言ってしまったと主張するクレーマーに勝
つ経験値がある
熊本市 甲賀 亨子
どか雪に近所の景は一変し町ごとおさまるかま
くらのなか
札幌市 三浦公佐子
ひとしきり久米宏さんの話して美容師は導くシ
ャンプー台へ
東大阪市 池田 敏子

働きて働きてなほ働きてわれは老後のひとり難
民
秋市 須山千江子
ほほ笑みとすました顔と爆笑の写真三枚遺影に
と兄
いすみ市 安藤 敦子
「勉強は生涯せよ」と祖母の教え思い出さるる
灯りのように
新居浜市 矢野 浩子

俵 万智選

冬の木が空にひろげる樹形図の一番上に小鳥が
止まる
東京都 武藤 義哉
【評】上の句、そもそも比喩的な「樹形図」
を、逆に樹の比喩に用いて、静かな冬の景色
を描いた。と、そこへ動きのある下の句。ま
るで小鳥が、自分こそ進化の最先端ですよと
言っているようで面白い。
ベテランの力士意外と持ちこたえ鯖の干物に焦
げ目が付きぬ
静岡市 柴田 和彦

【評】テレビの相撲中継に見入ってしまった
のだろう。干物が焦げるくらい時間という
のが、まことにリアルだ。
上役やめると言えぬ新人とやめると言える新
人がいる
京都市 寺西 和史

【評】「やめると言える新人」かと思いきや、
驚きの下の句だ。この「やめろ」は辞職では
なく、上司のふるまいについてだろう。
手のひらは手のひらサイズで出来ていて右も左
も便利で手軽
守口市 小杉なんぎん
寒き日は想ひ出すなりたひとり三和土に独楽
を回しぬしこと
市原市 井原 茂明
「戦争は嫌だ」と言えはやまびこも「嫌だ」と
答える春の夕暮れ
福島市 大槻 弘

歌を詠む側のわたしは未知である歌に詠まれる
母の気持ちは
堺市 一條 智美
治癒とチュウウ、似てるよねって言えはまた笑う
だろうけどほんとそうだよ越谷市 秋山ともす
早春のスポンジ擦るクレンザー力加減は恋のか
けひき
足利市 坂庭 悦子
ああ父の祥月命日といねいに作業着洗う週末過
ごす
柏市 塩田 淳文

黒瀬 珂瀾選

除雪車が眠り断ち切る夜明けまえ振動と音で積
雪量
横手市 吉田 雅勝
【評】僕も雪国暮らしなのでよくわかる。未
明に動く除雪車の響き具合で、布団にいなが
ら積もった雪の量を想像する。雪かきが大変
だと思いつつ起きる、雪国の朝の実景。豪雪
災害地域の皆様にお願い申し上げます。
本革のセカンドバックを買って時ゲンと背丈が
伸びた気がした
岐阜市 阿部 ナミ

【評】ちょっと背伸びして高級品を買って、
社会人として成長した気分になる。そんなと
ころからも大人の自覚は育つのでしょうか。
歯ブラシに載せてしまった桃の香のハンドクリ
ーム金曜の夜
久喜市 木元 貴子

【評】あるある。このクリームどうしよう
立ち尽くす夜に流れる、桃の甘い香り。相当
お疲れなんですよ、週末はゆとりと。
かがり火の匂いの残る元旦の斎庭に響く孫のか
しわ手
宇陀市 大畑美千代
二人して酒も飲めずにおでん食ふ 仕事の愚痴
を言ふのも愉し
つくば市 小林 浦波
保津溪を越ゆれば電車の窓に見る雲の中かもこ
れ丹波霧
奈良市 上田 達夫

川岸の芥もくたを引き連れて今し潮は川さか
のぼる
高萩市 工藤要五郎
忘れてはならぬことまでばつはつとなりゆく夫
にゑがほの増えて
横濱市 皆上 洋子
感情がすり減る音に絶え間なく締め上げられる
電車の時刻
高松市 樋口淳一郎
次はいつ連休ごとの再会を心待ちして昏れゆく
バス停
淡路市 河合 律子

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから ◇毎週月曜日に掲載 右の影絵はふくじゅそう